
異世界が来たっ！ ～俺と少女とファンタジー～

らいなあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界が来たっ！ ～俺と少女とファンタジー～

【Nコード】

N9071U

【作者名】

らいなあ

【あらすじ】

異世界に行くのはもう古いつ！

これからは、異世界が来る時代だ！……………えっ？
逆に古い気がしないでもない。そんなもんぶっ壊せ！

【あらすじ】

世の中が詰まらなさと感じる大学生。

「面白いこと起きねえかな？」それが口癖の青年はある日、異世界に行く
ではなく！何と異世界がやってきた！？

青年が住む町の上空に地球に似た大地が！そこから降って来たのは
……ドラゴン！？ゴブリン！？天使にサキュバス！？極め付け
は剣に魔法！？しかも 美少女！！？

基本的に主人公視点です。

0つめ！ プロローグっ！（前書き）

おはにちはー！らいなあです！

今回は学校に行っている間に考えた異世界モノです！

異世界モノと言っても異世界に行くのではなく、異世界が来る！？
という作品になってます！

警告としては、投稿は不定期になる予定ですので悪しからず。

ちなみに誤字脱字等の問題があればご報告いただければ対処します！

同時進行の「夢も希望も絶望すらない現実」^{グミットエンタ}もよろしくお願いします！

0つめ！ プロローグっ！

こんな話をして誰が信じるだろうか？

突然空に見たことも無いような地上が出現し、重力に引かれ合った惑星^{ほし}は段々近づいてきて。

そんな中、その地上から桜色の髪の美少女が降って来たなんて…

……誰が信じるんだ？

俺は空の地面を見上げて、そこが異世界の惑星^{ほし}だと認識するのに時間は掛からなかった。何故ならその地面に……魔法を見たからだ。いや、それだけじゃない。

ドラゴンがゴブリンがサキュバスが天使が剣が魔法が落ちてくれば、誰だって空の地面は異世界の惑星だと思えるはずだ。

もしそうじゃなくても、ゲーム好きの俺には異世界にしか見えなかった。

本当に誰が信じるんだ？こんな話？そう思いながら、俺は無意識に手を伸ばしていた。異世界に？違う。ドラゴンやゴブリンに？違う。天使やサキュバス？違う。剣でも魔法でも無い。

桜色の髪の……少女に。

空から降って来るモンスターや異種族、武器や魔法何かじゃなく、同じ年ぐらいの少女に俺は手を伸ばしていた。別に犯罪目的じゃない。可愛いからじゃない。ただ………何となく。

俺には、異世界やモンスターなんかより、その少女のほうが真っ先に視界に映ったんだ。

そして俺の思考を全て持っていかれた。

『あの子を助けたい』

ただその一点に。そうしたら後は素早い。少女が落ちてくる場所に向けて駆け出していた。

両腕を少女に向けて、顔を上げたまま、一直線に。

物が有るとか、モンスターが落ちてくるとか、剣が落ちてくるとか、そんなことは考えなかった。

それよりも、あの子を助けたい――ただそれだけで何でも出来る気がした。運すら味方につけたような、多分そんな感覚。

そしたら難なく辿り着けた。何の問題も無く。何も落ちてこずに。

俺はそれが何でも考えないで、ただ少女へ両腕を伸ばしていた。それに少女は返してくれたんだ。両腕を俺に向けて、満面の笑顔で。

意味が分からないよりも先ず、笑い返していた。満面の笑顔で。

そして少女は俺の腕にスッポリ収まったが、俺は踏ん張りきれずに仰向けで倒れてしまう。

幸い地面は芝生だった。怪我も無く、一見すると地面に寝転がっている俺の上に、少女が身を預けているような、カップルみたいな図になっていることだろう。

大丈夫ですか？少女が俺に聞いてくる。俺はそれに……ああ、大丈夫だ。そう笑って返した。

0つめ！ プロローグっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想をお待ちしています！

1つめ！ 異世界が来たっ！（前書き）

お楽しみください

1つめ！ 異世界が来たっ！

朝起きてもやる事無くて、たまに大学行くけど面倒くさくて。そんな毎日をダラダラと過ごしながら、俺は時々思っていた。

「ああ。面白いこと起きねえかな」

すると右横から、またそれ？ーと呆れた様に望んでも無い返答が返ってくる。

「あんた毎日それね」

俺の顔を覗き込むように顔を近づけ、明らかに馬鹿にしたような表情で俺を見る女性。

はつきり言ってウザイッたらありやしないんだが、これが昔世話になった恩師の娘となれば話は別だ。嫌々でも付き合っていかなければならない。

たとえば俺の顔を覗き込む彼女。名前は……宮坂英理子みやさかえりこと言ったか？愛称はエリー。

彼女の親には借りが有る。幼い頃、両親が居なかった俺を引き取って、ここまで育ててくれた恩が。

そんなことで、エリーとは幼馴染的な付き合いで収まるわけだ。これでエリーと縁を切ってみろ、たちまち俺の財産は底を突いて、借金まみれの苦学生になってしまうぞ。

「しょうがないだろ。つまんねえんだから」

だから俺は今日も、ウザイと言わずに普通に付き合っている訳だ。

「これから大学行くのに？」

大学だつて好きで行っている訳じゃない。エリーと、彼女の両親による強い説得のせいだ。

初めは面倒臭いから働くつもりだったのに、三人の強い説得に俺が折れる形で大学に行く事になった。望んでもいないのに。それから早一年、俺は十九歳になっても変わらず面倒臭がり屋だ。

「面倒臭いからな」

面倒臭いから詰まらないと言いつつも、内心では少し楽しみだった。

何たつて、俺たちが通う春桜大学しゅんそうの学食は、トッポクラスの味を誇っている。大学に行く楽しみと言えば、学食置いて他に無い。だからこの大学への道が堪たまらなく好きなんだ。学食食いに行くぞー！

「またにやけて……………どうせ学食でしょ？」

ギクツ！何で気付かれた！？……………あつ、にやけてって言ってたな。俺ってそんな顔してるか？

ふと視線をズラしてショーガラスを見るが、まったく顔に変化はない気がする。

「何で分かった？にやけてなんかいないだろう」

エリーに視線を戻して問いかけると、彼女はニコツと笑って溜息ためいきを吐いた。

「何年一緒に住んでると思っているの？」
「十五年」

俺は即答する。そりゃあ忘れてないけどさ。いくら十五年同じ家に住んでいたって、分からないものは分からないだろう。つい一年前までは同居していたとはいえ、ねえ。

「それだけ居れば十分よ」

とは言われても、なあ。俺にはエリーの細やかな表情変化は見抜けないぞ？女性限定なのか？

俺はそう聞く。するとエリーは目に見えるぐらい不機嫌になって、歩くスピードを速めた。

「お、おい！」

小走りで俺の前に出たエリーは、振り返って八つ当たり気味に怒鳴り散らす。

「うつさい！一人暮らしでもしたから感覚が鈍ったんじゃないの！
？司郎しろう！！」

そう言っただけで彼女は、逃げるように走っていった。

俺はその背中に向け手を伸ばしたまま、呆然と立ち尽くしているだけだった。

「何なんだよ……」

呟く言葉は虚空に消え行く。後に残った俺が惨めみじに感じた。

「何なんだよおおおおっ!!」

それが俺……鳳司郎おおとりしろうが二、三年振りに大声を出した瞬間だった。

――大学の帰り道。まだ夕暮れと言うほどでもない午後。

エリーに見捨てられた俺は、結局一人で帰る羽目になってしまった。おかげで商店街を歩く俺の足取りは――とてつもなく重い。あんな軽口叩き合っている間柄でも……いや、だからこそ、ケンカした後は気分が悪くなる。それを明日に持ち越すなんて在り得ない。

だが結果として持ち越すことに成りそうな事に、複雑な感情が渦巻いていて、それが足取りを重くさせている原因なのかもしれない。

「はあ、飯買って帰るか」

溜息一つで気分は――当然の如く――良くならず、とりあえずいつも買っている弁当屋で晩飯代わりの弁当を買うのだ。

「いらっしゃい！司郎君」

いつもの様に俺の名前を呼んでくれる弁当屋の女将さんに、いつもとは違う弁当を頼む俺。

いつもは焼肉弁当だが、今日は豚カツ弁当にしよう。そう決め、かなりボリュームのある豚カツ弁当……五百円を女将さんに頼み、しばらく待合室のベンチで待つ。

何とかこの暗い気分を打破しようと――去年一人暮らしする際に買って貰った――スマートフォンをポケットから取り出し、エリー

にメールを送る。

『朝は俺が悪かったよ。頼むから機嫌直してくれー!』

タッチパネルって早打ち難しいよね。そんな事を考えながら待っている、数分ぐらいで返事が来た。

『では許して進ぜよう。……………駅前のティーガーデンで五百円×三日分で』

『はあ!?!千五百円って馬鹿にしてるのか!?!んなもん法外過ぎるわ!!!』

返信の文章を見た瞬間、鬼気迫る顔でそんな文章を書き込んでいる俺が居た。

すると今度は数十秒くらいで返信が返ってくる。息を荒くしながら本文を開くと、そこには――

『じゃあ許さん。反省するべし』

――と書いてあった。はあああああああ!?!?何、するべしって!?!?

口には決して出さず、まるで銀さんみたいな感じで心中ツッコミを繰り返していた。

「司郎君、出来たよ」

文句のメールを送りつけてやろうか等と考えていた俺の耳に、女将さんの出来たよ宣言が届く。しょうがない、今回は許してやるか。――と、許してもらおう立場の筈の俺はその時思っていた。

女将さんから弁当を受け取り、財布から五百円玉でそれを支払う。

「いつもありがとうね」

「お互い様です」

俺は財布をしまい、女将さんの笑顔に見送られて弁当屋を出た。まだまだ青い空が澄み渡る頭上に、俺は少し気分が良くなっていた。若干スキップ気味に歩いていると、いつもの分岐点に差し掛かる。右行っても左行っても同じような時間で着くからな……。

今日の気分的には左だな。別に大した理由が有る訳でもないが、このあまり大きくない四季美町しきみで言えば、道によって大きく景色が変わってしまう。

たとえばここを右に曲がる。すると東京程ではないが、そこそこ大きなビルが立ち並ぶ駅前通に出る。ならば左はどうか？そうすると田畑や住宅が並ぶそこそこ田舎の風景が見えるのだ。

だから今日の気分は左。田舎の風景を見ながら帰リたかったからだ。

「はあ、面白いこと起きねえかな？」

俺的には普通のペースで。しかし普通の人から見れば少し速いぐらいのペースで、俺は左の車道を歩いて行く。その途中で、いつも見ている公園が視界に入った。

芝生（雑草？）の生い茂った、遊具が全然無い公園だ。有るのはベンチと滑り台と精々ブランコ。

俺は視界の端に公園を捉えつつも、いつもの様に通り過ぎようとした。しかし――

「ん？何だあれ？」

――公園の中心の丘の上に、何か良く分からない剣みたいのが刺

さっていたのだ。

子供の忘れ物か？そう思いながら丘の上まで行くと、その剣が放つ重圧が物凄いことに気が付いた。

「な、なんだ……！」

あまり装飾のされていない、西洋風の剣だった。そこまでは普通のおもちや屋で売っているだろう。しかし、その剣は白かったのだ。
刃先から柄頭^{えがしら}に至るまで。

そして何より、刀身の輝きがおもちやで出せるクオリティを超えている。まるで本物のようだ。――本物見たこと無いけど。

俺はその剣を手に取り、試しに引き抜いてみる。

誰かの忘れ物だったら交番でも届けなきゃな。――それだと俺捕まるんじゃないか？

そんなことを思った瞬間、右手に持った白き刀身の剣はその身を輝かせ、まるで太陽光を鏡で反射している様な光で辺りを包み込む。それが数十秒程続いたかと思ったら、その剣は光を徐々に弱めていった。

「……っ！何だったんだ？」

光が収まった頃、眩^{まぶ}しさで閉じていた目蓋^{まぶた}をゆつくりと開ける。

右手の剣を見ると、そこには何にも無かった。――いや、正確には十字架……というより剣の様なペンダントが右手に収まっていた。そのペンダントは淡い光を放ち続けている。

「何だこれ？剣は？」

公園内を見渡してみるが、白い剣はどこにも無かった。

しょうがないからペンダントに視線を移す。それは光を放つ不思議なペンダントだった。

まさかこれに？ーいや、それこそまさかだ。俺はペンダントを放ろうとするが、手から離れた瞬間にペンダントは俺の右手に戻ってきていた。

「……………おいおい」

もう一度やるが、結果は同じ。ペンダントを見つめて問いかけた。

「お前はあれか？キング ムハーツのキープードか？」

だが当然返答は返って来ない。やべえ、頭がパニックだ。

ゴチャゴチャになりそうな頭で思考するが、何一つ良い案が浮かばない。

そしてペンダントを見つめていると、不思議と吸い込まれそうな感覚に陥る。

白銀の美しい剣を模ったペンダント。それが俺に言ってくる気がする。

『我を汝が望む場所に掛けよ。さすれば扉が開かれる』

俺はそれの言うがままに首元に掛けた。するとペンダントが一際強い光を放ち、唐突に鎮まった。

首元に掛けたペンダントは光を発さなくなり、不思議な感覚は露と消えさる。

「取れねえし」

ペンダントを外そうとしても、全然外れなくなってるし。多分、俺が首を切らないと取れないんじゃないかなあ。――と冷静に（やけくそになっただけ）分析してみたり。

しょうがねえ。とりあえず腹減ったし帰ろう。これはその後だ。

――と決めて振り返った時、上空から違和感を感じて空を見た。

「えっ？」

そんな馬鹿みたいな呟きをもらしてしまつほど、上空にあつたのは驚愕だった。

そこにあつたのは――――

――地面だった。

「ええええええええええ！！」

何と上空の遙か先、多分大気圏前辺りから、もう一つの地球が俺たちの地球を覗いていたのだ！

「ユウイユ-? ユウイユ-?」

錯乱状態で頭を抱えて上空の地面を見ていると、ふと何気なく気付いた。

「あれ近づいてない？」

間違いない。さっきより近付いて来ている！えっ？あれ衝突すんの？

焦りと不安からジタバタする俺の目に、さらに驚愕のモノが降つ

て来るのが見えた。

「ド、ドラゴン！？ゴブリン！？天使に悪魔……というよりサキュバス！？」

ゲームとかで見た様な風貌のそれらが、俺たちの地上へ向けて落ちてくるのだ！

ドガン！ドガン！そんな音を鳴らしながら地上に降り注ぐモンスターたち。そしてさらに極め付けは――

「剣！？魔法！？危ないって！！」

それこそRPGとかで見たような剣に、明らかに火球とか雷撃の様なモノが降り注ぐ様は、さながら地獄絵図だ。

ファイアボール サンダーボルト

そんな中――

「あれは……」

とある一つのモノに眼を奪われる。というかモノというより者だな。

それは桜色の長髪をした、真っ白なドレスに身を包む少女。スカイブルーの瞳（何故か見えた）に、頭にちょこんと乗ったティアラ。まるでどこかの国の姫様だ。

それ思った瞬間に、俺はもう駆け出していた。意味も分からず。何となく。

そして俺は彼女を受け止め、大丈夫だ――そう言って笑っていた気がする。

1つめ！ 異世界が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

これでプロローグに繋がるわけです。

御意見御感想をお待ちしています！

2つめ！ お姫様が来たっ！（前書き）

お楽しみください

2つめ！ お姫様が来たっ！

少女を抱きかかえたまま、腕の痺れからしばらく横たわっていた青年が居た。俺なんだけどね。

さすが流石に高所からの落下を簡単に受け止められるほど、俺は優れていないし。――でもいくら少女とはいえ、あの高さから落下した人間を受け止めてこれで済むはずが無い。

「君、何かした？」

ほとんど勘だが、異世界から落ちてきたのなら特別なモノでも持っているのではないか？――という、現代からしたら完全に頭が痛い事を、その落ちてきた少女に問いかける。

「はい！グラヴィティ重力魔法の瞬間的無重力を」

何言ってるのか全く分からねえ。ゼログラヴィティただ無重力という単語が出てきたから、多分俺が受け止める瞬間にそれを発動して、俺が受ける衝撃を軽減させたのか？

じゃあ、ティアラが落ちなかったのも魔法か？……凄いな魔法って。

一人関心しながら、腕の痺れが引いてきた事を感じ、そろそろ立ち上がろうとする。――その前に。

「立てる？」

少女は俺の意図に気付き、すいません！と言って急いで立ち上がった。別にもう少しそのままでも良かったのに。俺は残念ながらもゆっくりと体を起こし、立ち上がろうとして手で何かを踏んでいる

事に気が付いた。

「ああ！俺の豚カツ弁当！？」

今まで全く気に掛けてなかったが、俺はずっと豚カツ弁当を持っていたのだ。剣を見つけた時もそう。頭上に異世界が現れた時もそう。少女を受け止めた時もそう。

となれば今の豚カツ弁当の事情は悲惨ひさんだろう。こんな風に中身は出てないけど弁当箱の中はグチャグチャみたいに成る位なんだから。

「晩飯オブザデッド！どうすっかな……」

頭を抱えて悩んでいる俺に、それならーと少女が提案してくれる。

「何かお作りしましょうか？」

「マジで！？」

弁当屋で見た奴と同じ、銀さんノリで、少女を見つめる俺。
少女は、はいっ！ーと笑って、豚カツ弁当を拾い上げる。

「これは私が頂きますね」

「いや、駄目だから」

「ええっ！？」

新鮮な驚き！？普通分かるだろ！ーというツツコミをグッと堪え、俺は立ち上がって豚カツ弁当を取り上げた。

「腹壊すぞ。止めとけ」

少女は渋々（しぶしぶ）、豚カツ弁当を諦めてくれた。本当に駄目だから。

そこまで言った所で、自己紹介して無い事を思い出し、俺はその節^{ふし}を説明して語る。

「俺は鳳^{おおとり}司^し郎^{ろう}。大学生だ」

すると少女は、ポカンとした表情で首を傾^{かし}げた。

「おおと・りしろ?」

「おおとり・しろう!」

発声が難しいのか?でも今まで普通に会話していたぞ?
しかし少女はポカンとしたまま、またもや言った。

「おおとりし・ろう?」

「わざとやってないか……!?!」

そうとしか思えないほど、少女は的確に俺の名前を間違えている。その後何回か訂正させたものの、結局は変わらず、俺が折れて呼び名はシローになった。

「私はヴァルクュリア公国第一公女、リリーシアディ＝マリア・ヴァルクュリアです」

「第一公女!?お姫様だったのか!?!」

「言ってますでした?」

「言っていない!」

まさかこの少女が姫様だったとは。いやまあ、頭にティアラ乗ってるからそうじゃないかな?とは思っていたけど、公国の公女とは

分からなかったぜ。

しかし、リリーシアディ＝マリア・ヴァルキュリアか……。聖母マリアの名を冠するとはな。そしてヴァルキュリア。昔見た書物でヴァルキュリアの語源の何たら語（名前忘れた）では、戦死者を選ぶ者と意味されていたらしい。戦死者を選ぶ聖母か。何か物騒だな。

「よし、リリシアだな」

「はい？」

「リリーシアディだと長いだろ？だからリリシア。ひょっとして怒った？」

いきなり失礼すぎるか？とも思ったが、彼女は驚く位笑顔になった。

「いいえ、怒ってません。素敵な名前をありがとうございます」
「う、うん」

後から聞いた話だが、何でもリリシアは渾名あだなを付けられた事が無いらしい。身近な人には何時もリリーシアディやマリアと呼ばれていたとか。だから渾名に憧れていたんだそうだ。良く分らん。だけど彼女って不思議な感覚するよな。姫様の割には親しみやすいし。何でだろう？

「どうかしました？シローさん」

「いや、何でも無い」

彼女の声を聞くとどうでも良くなってくる。まあいつか。分からなくてもこれから死ぬわけじゃないし。――これから？――ああ！彼女を助けたは良いけど、これからどうすれば良いんだ？

「リリシアはこれからどうするんだ？」

「さあ？」

やべえ、いきなり壁にぶち当たった。警察に保護して貰うか？――それは止めとこう。何されるか分からねえし。だって魔法使うんだぞ？何されるか考えたくも無い。

「とりあえず俺の家来る？」

「はい！」

ええー！？即答ですか！？少しも躊躇ためらわないだと！？この少女、手強いぜ。

何が手強いのか良く分からないが、とりあえず聞きたい事も有るし、一旦俺いったんの家へ行こう。……………何もしないよ？

「あの、シローさん」

「ん？どうした？」

様子が可笑しいリリシアは、後ろ…………とだけ呟くと、少し後ずさって行った。

俺は言われた通り後ろへ振り向く。ーと、全高三メートル程の真つ赤な鱗うろこを持つドラゴンさんがいらっしやいました。

「ドウラアゴン！？そっぴや落ちてきてたな！！」

驚きから豚カツ弁当が手から落ちてしまう。俺は構いもせず、ドラゴンを視界に捉えつつ、リリシアと同様に後ずさって行く。

「リリシアさん？これを何とかする魔法はございませんでしょうか？」

「無い事も無いですけど、町が……」
「じゃあ止めよう!」

我が身可愛さに町を吹っ飛ばしたら只事^{ただごと}じゃねえぞ!でもどうする?

俺が段々と迫るドラゴンさんの対処をどうしようか考えていると、不意に首に掛けたペンダントが、また光を発しだした。

「シローさん!」

何故かこのペンダントを知っている様なリリシアの雰囲気^{ふんいき}に、俺は何も言わずにペンダントを握った。

リリシアがこれを知っているのなら丁度良い!後で聞き出してやる!

「悪いが、見逃してくれないか?」

しかしドラゴン^{ドラゴン}は嫌だとばかりに咆哮^{ほうぼう}し、閉じた口から炎を見せる。閉じてもはみ出て来る炎^{えん}ってRPGっぽいな。

「まあ、見逃してくれないよね」

仕方が無い。そう呟^{つぶや}き、右手で握り締めたペンダントをより一層強く握る。すると、ペンダントを沿う様にオレンジ色の透けている鎖^{くさり}が首に現れた。

「ロックチェイン
護封器石……」

リリシアが驚きの声音^{こゝろね}で呟いたのを背に、首を覆^{おお}う鎖^{くさり}を引き千切るうとして――

「切れない……」

「それはそうですよ。封印解除してないですから」

――冷静に突っ込まれてしまった。そういう物なの？

そんな状態でもドラゴンは口内に炎を溜めている。デカイ奴が来るぞ！

俺があたふたしてる中、リリシアは小さく何かを呟いていた。そして考えが纏まったのか、うん……と頷くと、今度は声量を大きくマジックスベルして呪文を唱え始める。

『我^{われ}、汝^{なんじ}が源たる血を受け継ぐ者なり。我が呼び声に答えよ』

言葉を紡ぐ度、ペンダントの鎖の拘束力^{くうそくりきよく}が弱まっていく。鎖と鎖の間に隙間^{すきま}が出来ていき、その隙間を埋める様に青白い光が発光し出した。

『スケープゴート
仮封私承』

最後の呪文^{スベル}を唱えた瞬間、オレンジ色の鎖は轟音^{ごうおん}と共に弾け、青白い光はペンダントを握った俺の右手に集まる。――行ける。と同時に炎を溜め終わったドラゴンは、俺とリリシアへ向けて前足を踏み出した。準備はOKって訳だ。

「顕現せよ」

ドラゴンは口を開け、辺り一帯を包める量の炎を俺たちへ向け噴き出した！

時間がゆっくりに感じる。死ぬ前は世界がスローモーションに見

えるというけど本当だったんだな。でもまあ、死ぬ気は無いけどね！

炎が俺たちへ届くより前に、俺はペンダントを引き千切り、眼前に迫る炎へ突き出した！

「こ、これ……」

炎を遮るように突き出されたペンダントは、その形を変え、ドラゴンが放つ炎を欠片も残さず吹き飛ばす。俺の右手にはペンダントでは無く、全てが真つ白な剣つるぎが握られていた。

「せいけん聖剣……」

後ろのリリシアが正体を明かしてくれる。こ、これが聖剣か！うつひょー！ーゴホンゴホン！誰でも子供の頃の夢が叶ったらこうなるよね。

しかし本物の剣は重たいと聞いたが、この聖剣は全然重くない。空に成ったペットボトルを持ったのと何ら変わり無い重さだ。これなら俺でも扱えるぞ！

聖剣を両手で構えて、足に力を込めていく。聖剣が発する光が白から黄金に変わった瞬間、刀身を包む様に黄白色の粒子が展開し出した。

「これ必殺技の流れじゃね？」

衝撃波でも出るんだろうか？期待に胸を膨らませ、聖剣を地面に落として俺の右後方に持ってくる。刀身を包む粒子が光を発した時、脅威を感じ取ったドラゴンがノーモーションで火球を吐いてきた。

「俺の必殺技パート1……！」

どこぞの仮面つけたライダーみたいなセリフを口走った後、眼前に迫る火球へ聖剣を揮った。右下から左上への遅い斬撃。少しでも戦い慣れていれば簡単に避けられるほどショボイ攻撃だった。しかし聖剣を左上まで上げた瞬間、聖剣が辿ってきた軌跡をなぞる様に光が生まれ、次にはそこから膨大な量の黄白色の粒子が迫ってきた火球を消し去る。

その粒子は辺り一帯を包み込みながらドラゴンに迫り、粒子が触れた翼、足、手、頭の順に光に変えていく。全ての粒子が通り過ぎた時、ドラゴンは辛うじて保っていた体を全て光に変えた。

「すげえ……」

そう呟いた時には、前方に居たドラゴンは跡形も無く消え去っていたのだった。

放った粒子も上空に飛んでって、人知れず霧散する。後には聖剣を持った俺とリリシアが残っていた。

「よし、光の奔流撃と名付けよう」

さっきのに技名付けてた。俺は聖剣を右手で持ち、振り返ってリリシアへ問いかける。

「リリシア大丈夫………か」

「は、はい……」

リリシアを見た刹那、俺の全身を衝撃が駆け巡っていく。そんな……まさか。

彼女は先程ペンダントを拘束していたオレンジ色の鎖に、全身をグルグル巻きにされて、縛られていたのだ！

「リリシア……」

「はい……」

「写真撮って良い？」

「駄目です！」

怒られてしまった。でもそうか、さっきリリシアスケープゴート仮封私承って言うてたもんな。スケープゴートいけにえって生贄とかって事だから、ペンダントの封印をリリシアが引き受けたんだな。

『エンド私承終了』

恥ずかしさからかりリリシアは直ぐに唱えると、ほとんど無くなった拘束を解く。すると聖剣はペンダントに戻って、俺の首元へ独りでに帰って行った。

「ああ……。やっぱり戻るのね」

ちょっと残念と言うか。トラブルが回避出来そうな気がしたんだけどな。もう巻き込まれたけど。

「シローさん、お弁当……」

「ああ！」

またやっちゃった。知らず知らずの内に弁当落としてるし。そしてドラゴンの炎で消し炭になっているし。某上条さんじゃないけど不幸だ。

「まあいいけど、疲れた」

リリシアから色々話を聞きたいけど、今はこの疲れをどうにかしたい。とりあえず帰ろう。そう心に決めた俺だった。

2つめ！ お姫様が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

途中から眠気で何書いてるか分からなくなってしまいました。

でも一応まとめた気がします。次回はリリシアさんにお話でも聞きましょうか？

御意見御感想をお待ちしています！

3つめ！ 超展開が来たっ！（前書き）

お楽しみください

3つめ！ 超展開が来たっ！

「ただいま」

「お、お邪魔します！」

誰も待っているはずが無い薄暗い部屋に二つの声が木霊する。こだま俺とリリシアだ。

俺は手探りで壁のスイッチを見つけるとそれを押して電気をつけた。

「おおっ！」

何を感じているのか、リリシアは明るくなった電球を見て眼を輝かせている。

「ひょっとして向こうには電気は無いのか？」

「はい。大体ロウソクで……」

便利な事だけじゃないんだな、魔法があるって。

俺はリリシアを上がらせ、伴ってリビングに向かう。途中、玄関の電気は全部消していく。

「何故消すんですか？」

リリシアは本当に何も知らないようだ。俺の懐事情ふところを分かってくれよ。

「金掛かるからだ」

「へえ〜」

新鮮な驚きだな。当然か、向こうには科学なんて無いもんな。
リビングのドアノブを捻りつつ、自分で独りでに納得する。ついでに側のスイッチを押して電気をつけた。

「そこら辺に座ってな。飲み物持ってくるから」
「はい！お手数お掛けします」

キッチンに行き、冷蔵庫から作り付けの麦茶を取り出す。それから食器棚のコップを二個取ってリビングに戻った。

「……って、何やってるんだ？」
「そこら辺に座ってると言われたので……」

リリシアはソファが有るにも拘らず、律儀に正座で床に座っていたのだ。

「俺の言い方が悪かった。ソファに座れ」
「はい！」

そう言うとうやくソファに座った。色々と面倒臭い少女だ。言いか次第で何でもするんじゃないか？……………何もしないよ？

「麦茶だけ良かったよな？」
「大好きです麦茶」

なら良かった。リリシアの斜めに位置するソファに座って、二つコップをテーブルに置く。両方に麦茶を注いで片方をリリシアに渡し、もう片方を持って麦茶を飲んだ。そして減った分を注ぎ直して、麦茶の容器をテーブルに置いた。

「それで、話を聞かせて貰おうじゃないか」

コップを両手で持って可愛らしく麦茶を飲んでいたりリリシアは、一旦飲むのを止めて、ニコニコしながら俺に視線を向けた。

「はい。どの辺りからお話したら良いでしょうか？」

そう言われても良い様に最初の質問は決めてある。

「じゃあ……………スリーサイズは？」

「上から90、57、91です」

答えんの！？開口一番のボケが流されてしまった！………そういうリリシアってこんな子だよな。会ってから一時間も経ってないけど何となく分かる。

「冗談を本気で答えないでくれ……」

「冗談だったんですか？」

八割本気だけど。見ればリリシアは精神的ダメージは皆無かいむな様で、ニコニコしながら麦茶を飲んでいた。結局俺が損したのか？いや、スリーサイズを聞けたからチャラにしよう。

「遊ぶのはこれ位にして、先ずはどうしてアレがここに現れたのか教えて貰おうか」

無意識に頭上を指して異世界である事を示す。リリシアは簡単です。ーと胸を張って即答した。

「繋がったからですよ」

「繋がった？」

一言だけで理解できるほど俺の頭は優れてないぞ。と言いたくなるが、続け様に説明しようとしているみたいだから言わないで置こう。

「基本的に世界が繋がるとは、送信者と受信者が必要なんです。今回の場合は送信者である私と受信者であるシローさん」

「何を持って受信者とするんだ？俺は何も受信してないぞ？」

「受信と言ってもこちらの世界で言う電波？とは違います。送信者が渡りたい世界に契約使物けいやくしぶつを送るんです」

物品契約か。俺はそれを受け取ったが為にこっちに異世界を呼んでしまったのか。

本当ならお前頭大丈夫か？と言いたくなる様な話だが、現実には遭遇かていしたしなあ。信じたと仮定して話を進めるしかないだろう。

「じゃあそれが、俺の持っているコレか？」

ある程度は推理出来る俺の性質を最大限に生かした結果、予測としては受信物は聖剣の事ではないか？という結論に至った俺。首のペンダントを持ち上げてリリシアに問いかける。

「はい。私が居た世界……アクション・ディフォリアでは四聖剣ソイ四ド・オブ・フォース大元素剣の光属性の聖剣、『エクスカリバー』と……」

「聖剣『エクスカリバー』……ねえ」

在りがちな名前だな。しかも四大元素剣ソイド・オブ・フォースって……。RPGでは定番だよな。もうちょっと設定変えられなかったのか？まあ現実にあ

る世界に設定変えろって言うのも無理な話だが。

「ていうか何でそんな物を送るんだよ」

「一番近くに有ったので」

おばちゃんか！一番近くに居たからそれ取って。じゃねえんだぞ！？聖剣を粗末に扱いすぎだろ……。いつか罰^{ばち}当たるぞ。

「ん？じゃありりシアが落ちてきた時に笑っていたのも……」

「シローさんが聖剣を持っていたのでつい」

「俺がリリシアを助けたいと思ったのも……」

「受信者は送信者に必ず出会うようにプログラムされています。思考に改変をして」

「マジで？」

「ええ、マジで」

なるほど道理で。これではほとんど疑問は解けちまったな。

俺は麦茶を口を含む。リリシアも同様に麦茶を飲んでいた。当たり前前のように場が静かになる。

んゝ他に聞きたい事有ったかな？……アレか？

「こうなった仕組みは分かった。でも送信者が受信者の世界に行くというなら分かるが、何で世界ごと一緒に来るんだ？」

問いかけると、リリシアはコップから口を離して返答してくれる。

「それは簡単です。生物単体での空間^{テレポーテーション}及び時空の転送は不可能だからです」

「ん？つまりは……」

今の話から推測するに瞬間移動テレポートには何か特別な条件が必要で、生身の肉体ではそれは出来ない。

「惑星ほしは送信者を送る箱舟はこぶねみたいな物か？」

「そうです。馬車や家等では耐え切れないので世界ごと」

何て厄介な代物だ。――ていうかそれなのに何でリリシアはコッ
チ来たんだ？

「屋敷の書物にこちらの世界の事が描かれていたので行って見た
くなりました」

俺の思考を悟ったのか彼女はそんな事を言っていた。行って見た
くなったからって来るか？普通？……………普通じゃなかったな。

「ああ！それよりも……！」

「それよりも、って……」

ほらこの通り……。リリシアは何か思い出した様子で俺のペンダ
ントを見る。

「まだ本契約エンゲージして無いですよね？」
「本契約エンゲージ？」

「この子は意味を知って言ってるのだろうか？エンゲージの意味。
婚約エンゲージだぞ？」

多分、いや絶対婚約の事を言ってる訳じゃないだろうけど、傍はたか
ら見ればプロポーズと何ら変わらないだろう。

「送信者と受信者による契約です。契約使物………別名契約を司
ジリンクス
る証明物を使つて行うんですよ」
「それをするかどうかなるんだ？」

ふとした興味が俺を襲う。リリシアに問いかけると、彼女はニコ
ニコしながら答えてくれた。

「送信者の存在を固定するんですよ。時間が経つと離れて行つてし
まう世界同士を繋ぎ止めて置くんです」
「ふうん。それが本契約か」

ちゃんとした理由も有ったんだな。一人関心に耽ふけていると、リリ
シアはそれと——と、とても大事な続きを言ってくれた。

「こちらの世界の婚約エンゲージと同じ意味もあるんですよ！」
「……………はあ？」

「何も知らない送信者じしんをサポートしてくれ、あわよくば受信者あいての下
で種を存続させる。言わば本契約は夫婦けっこんの契りと同じ意味もあるん
です」

そうだったのか。知らなかったよ。H A H A H A。……………
…っ、はあああああああああ！！？

この日一番の絶叫をした気がした。————心の中で。

3つめ！ 超展開が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回も説明回になりそうですね。

御意見御感想をお待ちしています！

4つめ！ 選択肢が来たっ！（前書き）

お楽しみください

4つめ！ 選択肢が来たっ！

「君はそれで良いのかよ！！？」

「はい、覚悟して来た事なので」

何てコツタ。突然やって来た美少女が結婚してくれと言っている。
ああごめん、ちょっと端折^{はしよ}り過ぎた。正確には――

――異世界からやって来た姫様が――

――かくかくしかじかで――

――俺と婚約することになった――

説明する気無いだろ？ そう言われそんな文章だな。ごめんなさい。
つまり要約すると――

――こつちの世界にやって来た異世界を存在し続けさせるために――

――契約途中だった儀式？ を完成させる必要があるのだが――

――その儀式を終わらせるには俺とその姫様が婚約紛いの事をしなければならぬ――

――という事らしい。さっぱり分からん。

俺は勢い余って立ち上がった体をもう一度ソファに落とし、落ちて着いてこの状況の突破口を探る。

落ち着け。リリシアはそう言う意味も有ると言っただけで直接的に&実際に結婚するとは言って無いだろ。だったら本当に夫婦にならなくても良いんじゃないか？ そう言う道を取った人も居れば取らなかった人も居て当たり前だろう？ フッフッフ。本契約^{エンゲージ}の弱点見破ったり。

俺は麦茶を一飲みしリリシアに向き合う。彼女も同様にしていた。

「本契約はしたとする。でもそれをしたからと言って実際に夫婦になる訳じゃないんだろ？」

リリシアは桜色の長髪を弄り出して言いずらそうに視線を逸らす。

「そうですね……過去の例では全件そう言う仲に……」

「思考の改変？」

「はい……」

さっきあわよくばって言ってなったつけ！？オワタ！確実にオワタ！頭の中まで変わったらどうしようも無いじゃないか！

「でももしかしたら100%じゃないかもしれませんよ？」

リリシア、それは慰めにはならない。覚えておくと良い。

というか何故彼女はそこまでしてコツチの世界に来たかったんだ？よっぽどの思いが無けりゃ、知らない奴といきなり婚約は出来ないだろう。

「リリシアはどうしてそこまでここに拘るんだ？」

直前まで考えていた事を吐露すると、リリシアは俯いてボソボソと小さく呟く。

「私は生まれてから十八年間、ずっと過保護に育てられました。外にも行けず、自由な時間も無く、寂しい毎日だったんです。でもある時、屋敷の書物の中に地球の本があつて……。本の様子は……楽しそうでした」

ヤバイ、予想以上にヘヴィだ。俺の手に負えない。

しかし、彼女の真摯な思いには、いくら俺だって心がブレない訳が無い。

「それで？」

「はい」

くっ、そんな顔で見られたら俺の良心がガリガリ削られて行くじゃないか。

彼女の覚悟の入った凜^{りん}とした表情に心が奪われて行く。せめてと最後の理性で少しだけ抵抗した。

「少し考えさせてくれ」

リリシアはちょっと残念そうな顔になったが、直ぐに表情を戻して、今日中にーと言った。

それが期限だろう。息抜きついでに彼女を家に残して近くのコンビニに行く。

家を出た途端、ファンタジーな世界に若干驚く。そういや忘れていたが、異世界から落ちて来たのはリリシアだけじゃないんだよね。

「はは、本当に何だコレ？」

前方の横切って行く皮膚が緑色のゴブリンとか、地面^{コンクリート}に刺さった剣とか、俺にはとてもじゃないが現実に見えない。あるいは俺が夢を見ているのかもしれないが。しかし……

「ああ、分かってるよ。夢じゃないんだろ？分かってるよ！」

横切って行ったゴブリンが俺の存在を視認した途端、声を荒げて

襲い掛かってきた。手に持ったナイフを振り上げて直ぐに切り掛かって来る。

俺はそれを左に避けて、カウンター気味に右ストレートをゴブリンの顔面に叩き込んだ。

打ん殴られたゴブリンは半回転しながらコンクリートの塀に衝突し、地面に落ちる事無く一瞬で光になった。武術はやってないから大した威力は無い筈だが……。

五メートル位先の塀に、一メートルに満たないとは言えゴブリンを叩き付けるほどの力は俺には無い。――^{エクスカリバー}聖剣とやらの力か。

右手を見れば、少しの光に包まれた拳にくつきりと殴ったかのような後が付いている。殴った感覚も未だにあった状態で。それらの事がこれを夢じゃないと告げているかの様だった。

「はあ、どうなってんだか」

一応会話上は理解したつもりだが、それでも「現実です」「はいそうですか」とは行く筈が無い。やっぱりどこかで、非現実的な様に思考が拒絶反応を示しているのかもしれないな。

俺はそんな事を考えながら歩き出した。アパートの敷地から車道へ出て、左に曲がる。

ふと空を見ると、近付いて来ていた異世界（アクション）ディフオリア）がピッタリと停まったまま動かなくなっていた。それどころか……

「離れて行ってるよな。絶対に」

少しづつだが、確実に距離を離して行っている気がする。あれがタイムリミットでもあるのか。

直ぐ近くのコンビニに辿り着いた時、ちょっとした疑問が頭を過ぎって来た。

何でコンビニ店員や客は平然としているんだ？

自動ドアを潜った所で初めて異変に気付く。コンビニ内の漏れ無く全員が今までと変わらず普通にしているのだ。外の非日常に気付いていないのか？

そう思ったが、客の一人が俺を通り過ぎて外へ出て行く。目の前を天使が行き交っているのに、まるで何事も無かったかのように歩いて行った。

そう言えばリリシアが本契約の事をこう言っていた。

――送信者の存在を固定するんですよ。時間が経つと離れて行ってしまう世界同士を繋ぎ止めて置くんです――

《存在の固定》

もしかしたら本契約しないと、モンスターや武器魔法と言った異世界のモノも現実化出来ないのかもしれない。俺が見えたり触れるのは受信者だからか？

ずっと入り口の所に居る俺に不審を持った店員が話しかけてくる前に、俺はコーラと雑誌をレジに持って行って会計を済ませる。終わってコンビニを出た所で、宮坂英理子……エリーとバッタリ出会った。

「あら司郎。反省はした？」

最悪だ。こんなタイミングでエリーと出会っなんて。

「六割七分七厘ぐらい」

「じゃあティーガーデンで五百円×二回ね」

前回から一回減ったのは良いがそれでも高いよ。そう突っ込むのも何か癪^{しげ}だし、今はエリーに構っている暇は無^ないんだ。さっさと帰ろう。

俺はじゃあなと告げてエリーの横を通り過ぎる。

「待つて司郎」

「何だよ？」

袖を引つ掴まれて進行の邪魔された。用は俺には無いだろうが。何なんだよ。

「あんた面白い事でも起きたの？」

「はあ？」

突然何を言っているんだこの女の子は？^{おんな}

振り返ってエリーを見れば、彼女は分かっているわよと言わんばかりの視線で俺に語る。

「大体会った時はいつも『面白いこと起きねえかな？』とか言っている司郎が今回に限って言わないなんて……………そうとしか考えられないでしょ？」

「っ！！？」

そうか。俺、リリシアと出会ってからそんな事一回も言っただけ。今更気付いた。

俺は心の中でこの事態を楽しんでいる？こんな非日常的出来事を？体が身震いした気がする。鳥肌も立った様な。自然と口元もにやけて来た。

「司郎？」

エリーが俺の様子に声を掛けてくるが、俺はエリーによって得た

答えが頭の中で渦巻いている為、何も聞こえなくなっていた。

「そうだったんだ……」

「えっ？」

俺は求めていたんだ。こんな非日常を。頭の中で常識人ぶって、拒絶をしている様に俺自身思わせていた。何が考えさせてくれた。これは俺が求めた非日常^モだろうが。記憶が在るだけで十年間、ずっと求めていた異常^モだろうが！

面白くなるなら何でもすると思っていた中学時代。

面白くなるなら死んで良いと考えていた高校時代。

そして今、面白くなる為の最後の扉が目の前に転がっているのに自分から手放そうとしている。

「俺にはそんな選択は死んでも出来ねえ！」

「司郎!？」

エリーの反応すら耳に届かないまま、俺は一目散に俺の家へ向かう。

俺は心の中で呪文の如き唱えていた。過去の自分に。

『中学&高校時代の俺!その時の覚悟をもう一度俺にくれ!!』

「リリシア!」

家に着き、玄関扉を開けると同時にリリシアと叫んでいた。しかし返答は返って来ない。それどころかリビングの電気すら点いていない様だった。

「リリシア！どこ行つた！？」

早々に靴を脱ぎ捨て、足音すら気にせずドカドカとリビングへ走る。リビングのドアノブを掴んだ瞬間、直ぐに異常を察知した。

「あつっ！！」

ノブから手を放して凝視すると、若干だがノブが赤くなっていた。「ちっ、帯熱してやがる。中ではキャンプファイヤーでもやってるのか？」

ほぼ確実にドアノブを捻^{ひね}る事は不可能だろう。捻^{ひね}る前に手が焼けるだけだ。

俺は少し後退して距離を取り、一息に駆け出してリビングの扉自体を蹴り飛ばした。跳び蹴りだ。

音をたてて蝶番^{ちょうつがい}がぶっ壊れ、勢い余った扉は若干滞空^{たいくう}してからリビングの床に転げ落ちた。

「リリシア！大丈夫か！？」

リビングに侵入すると、異常が異常を呼んで最早奇天烈^{もはやきてれつ}に成っていた。

ソファやテーブルと言った家具類は壁に張り付き、十二畳程のリビングの中心に大きな隙間^{すきま}が出来ていた。そしてその隙間に直径二メートル程の紋章が描かれている。俺はそれを知っていた。魔法施行の際、術式を描き現実の世界に現象を促す。名称は魔法陣^{まほうじん}と言った筈。

その魔法陣に取り込まれるかの如く吸い込まれていくリリシアが、俺の存在に気付き目一杯叫ぶ。

「シローさん！」

リリシアの歡喜の声を受けながら、俺は少しの焦りと大半の勇氣を持って彼女に問いかける。

「どうすればこれは治まる？」

あまり五月蠅くは無いが、いい加減にしないとアパートが壊れそうだった。

故にさっさと收拾させたいのだが、何分自分には魔法知識が無い。ここはリリシアを頼るしかないのだ。

「これは異世界人を押し戻そうとする魔法です！聖劍で効力を弱めた後に本契約すれば治まります！」

つまりは前提として本契約が必要って事か。聖劍はリリシアに解いて貰えば良い。

見ればリリシアは複雑な表情で俺を見ていた。嬉しさや何かはともかくとして、本契約してくれないんじゃないか？とか、見捨てられるみたいな感情が見え隠れしていた。

俺は首のペンダントを掴み、そんなリリシアに思いの丈をぶつける。

「本契約はする。だけど婚約とかは責任を取れない。面白いかどうかは自分で決めるからだ！」

おそらく全ての人がはあ？と言った顔になったに違いない。だがこれが俺の全て。面白い事には全力を注ぐのが俺のモットーだ！しかしリリシアはそんな顔にはならず、満面の笑みで笑いかけられる。

「はい！シローさん！」

面と向かって言われると恥ずかしいな。視線を下に逸らすが、ペ
ンダントからは手を放したりしない。

間も空けずに、ペンダントを握る右手に力を込める。オレンジ色
の透けたチェーンがペンダントを沿う様に発現する。俺はリリシア
に視線を戻し頼む様に言った。

「リリシア」

「はい！」

ドンドン魔法陣に吸い込まれていくリリシアは目を閉じ、先程の
様に呪文マジックスペルを唱える。

『我われ、汝なんじが源たる血を受け継ぐ者なり。我が呼び声に答えよ』

チェーンが分解されていき、間に隙間すきまが出来てくる。その隙間に
青白い光が充満し、拘束力も弱まった所で止めの様に言い放った。

『スケープゴート
仮封私承』

轟音と共に弾けたチェーンを一瞥いちべつもせず、俺は右手に集まる青白
い光を振り払うかの様にペンダントを引き千切った。そして言う。
希望に満ちた様な言葉を……。

「顕現けんげんせよ」

4つめ！ 選択肢が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

永い序章ですね。自分で書いてて思いました。

夢も希望も絶望すらない現実（リセットエントリ）は今月22日から再開します。是非ともご覧下さい。

御意見御感想をお待ちしています！

5つめ！ 本契約が来たっ！（前書き）

お楽しみください

5つめ！ 本契約が来たっ！

「^{けんげん}顕現せよ」

そう呟き、ペンダントを正面に両手で構える。するとペンダントが柄頭、柄、鰐、刀身、刃先と、聖剣へとその姿を変えていく。全ての具現化が完了した時、聖剣を白き光が包んだ。

「ちっ、^{フォーリンリーフ}光の奔流撃じゃ強すぎるか？」

俺は前回の必殺技について考察していたいが、少なくとも時間は無い事と家の中である物じゃない事は分かる。どうする？

「シローさん！^{イメージ}想像です！光は多種多様を実現する無限の粒子です！」

「わかった」

腰ぐらいまで魔法陣に沈んだリリシアが懸命に助けを待っている。のんびりはしてられねえな。

リリシアは想像^{イメージ}と言った。光は多種多様を実現する無限の粒子とも言った。———だったら狙った場所に命中する光の矢を想像^{イメージ}すれば良いんじゃないか？

光の矢が魔法陣^{うが}だけ^{イメージ}を穿つ想像。数は———五。

「^{ディヴァイデットソード}名前は無限を穿つ光の剣だな」

矢と剣は結構違うのだが、光にそれは関係無い。^{エクスカリバー}一歩踏み出し、聖剣を頭上へ振り上げる。目を閉じて更に想像^{イメージ}しやすい様にして。

「頼むぞエクスカリバー」

イメージ
想像が固まった所で目蓋を開き、着弾地点を設定する。

俺から魔法陣を見た時、縦の座標をx、横の座標をyとして、寸法として5の値に設定する。この座標上から見た「x4」「y4」の場所に二本。手前右側の辺りだ。そして「x2」「y3」の座標に一本。「x2」「y2」の座標に一本。左奥だ。ラストに「x4」「y1」の場所に一本。右奥。

設定は終わった。これを設定するまで実に二秒。凄い早業だ。

これで準備は整った。視界には五つの光の球体が俺の目の前に有る。これが攻撃する矢だ。

「いつけえ！」

全ての準備が終わった所で聖剣を振り下ろす。やはり遅い袈裟斬り。しかし目の前の球体を斬り付けた瞬間、球体が矢と成って目標地点へ飛んでいく。矢とは思えないほど複雑な動きで。

飛んで行った五本の剣は想像で定めた地点へ向かって行き、着弾と同時に小爆発が起きる。これも想像だ。圧縮した光の粒子を外からの衝撃によって辺りへ拡散させ、目標を内と外から破壊する。

デバウアイデットソード
「これが無限を穿つ光の剣だ」

そう言った刹那、魔法陣がガラスを割った様な音と共に弾けた。吸い込まれそうだったリリシアが吐き出され、空中を舞う。

「シローさん！」

「リリシア！」

床に落ちる前にリリシアを抱き止め、何とか怪我をさせずにすん

だ。

「本契約^{エンゲージ}はどうすれば良い？」

すぐさまリリシアに問いかける。再生され始めた魔法陣があまり時間が無い事を示しているからだ。

彼女は仮封私承^{スケープゴート}を解くと、俺の首に戻ったペンダントを大事に両手で包む。

「私の手の上からペンダントを包んでください」

言われた通りに、リリシアの手の上から両手でペンダントを包み込む様にした。

「次は？」

「最後にどこでも良いので私にキスしてください」

「はあ？」

「早く！」

んぐっ！何と言う究極の選択。本契約^{エンゲージ}って言うからそんなんじゃないかと思ってたけどさ！どこにすれば良いんだ？ー口は当然却下！ー類はアレだな。ハズイ。ー鼻はマニアックすぎるだろう。どうするか？

「早くしてください！」

「はい！分かりました！」

くっそ、無難に額で良いやもう！どうなっても知らねえぞ！

高鳴る心臓を必死で抑え込み、ゆっくりとリリシアの額へと顔を近づける。身長差約十六センチ。額へは簡単に出来るーが。俺、こんな事した事ねえし！

多分変な汗が背中を伝う中、俺たち（というかりリシア）にゆっくりと魔法陣が迫ってくる。

俺の顔はおそらく真っ赤だろう。リリシアも頬を紅潮させ、俺に身を任せる様に目を閉じていた。

『逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ……！』

何故か使い古された感が否めない言葉^{いな}を心の中で唱えつつ、リリシアの額へと段々顔を近付けて行く。後十センチ、五センチ、二センチ――零^{ゼロ}。

俺は彼女の額に軽く唇を当てた。

多分その表現が正しい。リリシアは一瞬ビクンツと驚いた様子だったが、直ぐに紅潮した頬のまま唱える。終わりの言葉^{エンゲージスベル}を。

『エンゲージマリッジ
本契約承認』

瞬間、俺たちの手に包まれたペンダントが太陽の如き輝きを発し、俺たちの足元に青色の魔法陣が描かれていく。青色の魔法陣に触れた現存する魔法陣は、さながら砂と成って風に晒^{さら}された様に散り、光となって消え行く。そして部屋一杯に描かれた青色の魔法陣は俺たちを中心に展開された。

『承認した。汝らの存在を固定する』

そんな声が頭の中で響いた時、青色の魔法陣はもう一度俺たちに集まって行き、俺たちの足元を包むぐらいまで小さくなった。しばらく何も起こらなかったと思ったら、唐突^{とつとつ}に魔法陣が上昇して俺たちを調べる様に頭まで上がって行く。頭上で止まった魔法陣は、まるで天使のリングのようだ。

そして魔法陣は回転を始め、ドンドン小さくなったと思ったらい

きなり消えた。

「はい、終わりましたシローさん」

ペンダントの輝きが収まった時にリリシアがそう言った。なるほど、これが本契約。^{エンゲージ}

俺はリリシアから手を離し、バツが悪そうに視線を逸らす。あんな事があつた後だしな。

というかエンゲージ^{スベル}マリッジって単純に読んだら婚約結婚だからね？誰だよこんな呪文考えた奴。

「意外と早かつたな」

現実から逃走を開始する為にリリシアに聞くと、儀式は大体こんな感じです。という返答が返って来た。そんなもんなのか。視線を部屋中に向けて見るが、有様は最悪だ。リビング壊滅してる。

「リリシアはこれからどうするんだ？」

出会った時にも問いかけた質問をもう一度問いかける。

「私はシローさんと一緒にいます。行く当ても無いですし」

まあ当然だよな。今日こっちに来たばかりだし。――って、待てよ？それってつまり同棲？

「そういう事になりますね」

心を読まないでくれリリシア。マジか！やべえどうしよう？？こんなのエリーに見つかったら……！

「――司郎、あんたいたいけな少女を連れ込んで何やってるの？最低。絶交ね――」

「――って言われるに決まってる！俺、苦学生になる！？大学通って生活費払って……無理だ！そんな金ねえよ！！」

俺がどうしようか考えているとリリシアが大丈夫ですよーと声を掛けてくれる。呑気だな。振り返って彼女を見た。視線を向けられたリリシアは目的が叶ったのが嬉しいのか満面の笑みだった。

「一緒に頑張りましょうシローさん」

彼女の言葉には魔法でも掛かっているのだろうか？不思議と気分が落ち着いてくる。

「ああ、そうだな」

俺も笑い返して一緒になって笑っていた。

まあ、これからはこれからだ。ゆっくり考えれば良い。だって俺は最高に面白い事を手に入れたのだから。これまでの分、じっくり楽しんで行こうじゃないか。

5つめ！ 本契約が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

一先ず序章を終える事が出来ました。次回からは日常篇って所でしよう。

所とある読者様から僕が投稿した短編小説の連載版が読みたいという御意見を頂きまして、そちらも考えようと思います。

御意見御感想をお待ちしています！

6つめ！ 買い物へ行こう！（前書き）

おはにちは、らいなあです。

結構な間を開けて申し訳ありませんでした。

不定期とは言えすいません。

現実の方に引つ張られすぎました。

ようやくと投稿したけど何がある訳でも無いんですけどね。
ではお楽しみください。

6つめ！ 買い物へ行こう！

「ふあ……」

ソファで寝転がっていた俺は身を起こし、寝起きでボサボサの頭を掻く。

今日はリリシアが来て二日目。本契約をした翌朝だ。

寝起きで寝ぼけたままの目で、今の自分の状況を確認する俺。

乱雑に家具が置かれているリビングに、ポツンと置かれた白いソファの上に俺は居た。昨日の後、片付けてないんだよな。

まだ完全に回っていない頭を鬱陶しく思いながら過ごしていると、リビングの扉が開いてリリシアが顔を出した。

「おはようございますシローさん」

「リリシアか。おはよう」

彼女は頭だけをリビングに出し、恥ずかしそうにモジモジしている。

どうしたんだ？ 見ればリリシアのスカイブルーの瞳が行ったり来たり忙しそうだ。

「あの……変えの服が無いんですけど」

どうしたら良いでしょう？ と言う彼女は自分の服装を見せる為に扉から体を出す。その服装は、

「ぶっ！？」

白いYシャツを着ただけで、後は下着しかはいてない様だった。ヤバイ、鼻血出そう……。ていうか萌える。

俺、何でガ

ン見してんだ？

「ごめん。それは考えてなかった」

何分、男一人暮らしなもので。とりあえず極力リリシアを見ないようにソファから立ち上がると、リリシアを伴ってリビングを出る。

「そうか。リリシアが住む様になるんなら色々必要だな」

全く考えてなかった。男の俺とは違ってリリシアは女の子だからな。必要な物も多いだろうし。

途中、俺の部屋に入ってタンスから服を引っ張り出す。出来れば男女兼用の方が良いよな。

「これはどうだ？」

ジーンズと無地のＴシャツを取り出してリリシアに見せる。

「良いですね」

「んじゃ、それに着替えてくれ。それと、この後飯食い終わったら買い物に行くぞ」

気に入ったみたいだし、ジーンズとＴシャツをリリシアに渡して俺は部屋を出る。

とりあえず……………飯でも準備するか。俺はリビングに戻った。

「準備出来たか？」

「はい」

午前１０時半。朝食を食い終わった俺たちは、リリシアの生活用

品を買う為にショッピングモールに行く事になった。家から徒歩で三十分程の場所にある、四季美^{しきみ}モールという所だ。

そこそこ田舎の四季美町には土地が有り余っている。その有り余った土地を無駄に使いまくった四季美モールには、ありとあらゆる店が軒を連ねている。

例えばカーショップ、例えばエステサロン、例えばゲームセンターと言った風に、無駄を詰め込んだような場所だ。しかし何でも揃うと言うのは便利でもある。近場と言うことも幸いして俺はちよくちよく行くんだけどな。

「忘れ物は？」

最後の確認ばりにリリシアに問いかける。彼女はポケットを引っくり返して持ち物を確認すると頷いて笑顔になった。

「大丈夫です」

「んじゃ行くか」

タクシー何て便利な物と呼べるはずも無く、俺たちは徒歩で四季美モールへと向かった。

その道中、俺はリリシアから色々な事を聞かせてもらった。

「リリシアって魔法使ってたよな？」

「はい」

「それって俺も使えないのか？」

尤^ももな疑問だと思う。やっぱ人間誰しも、魔法に憧れるだろ？
しかし、リリシアは首を横に振ると、理由^{わけ}を話し始めた。

「それは出来ません。そもそも魔法とは、様々な条件^{てきせい}を突破^{クリア}した者

だけが使える物なんです。万象に理念を付加し、描きた空想を具現化する術。それが魔術であり、それを戦闘用に簡易化したものが魔法なんです」

「うん、そうか、俺が悪かった」

いきなり小難しい話になったぞ！ただようは、俺は使えないという事だけ分かった。

もう俺には手に負えない。話題を変えるしかないだろう。

「ん？そついやモンスターは？」

ふと、昨日から全く居ないモンスター達へ話題を変える。

べ、別に魔法の事が分からなかったんじゃないんだからねっ！

しかし、リリシアは笑顔で俺の疑問に返答してくれる。

「本契約は基本的に送信者しか存在を固定する事は出来ません。そもそも空間及び時空の転送は不完全な魔法で色々問題が生じる場合があるんです。今回の場合はモンスターの転送。その生じた問題を解消する為には本契約をするか、本契約をせずに一定期間過ごす事です」

「つまりは本契約したから問題が消えた……と？」

「そつ言う事になります」

なるほど、納得。でも確かに不完全とは言え空間及び時空の転送という魔法が確立していると言う事は、今までも少なからずは異世界渡航が有ったと言う事だ。それで起きた問題を解消せずにしていたら大変な事に成っていただろう。それでもこつちの世界に認知されていないのだから問題は解消していた訳か。関係無い奴には完全に知られる事は無い。意外と凄い魔法だ。

まあ、これでこつちの世界に危険が及ぶ事は無くなった訳だ。ゴブリンとかドラゴンとかが居たら死者が出かねないからな。安心安心。でも、前に考えた俺の仮説は少し違っていたのか。ちよっとシヨック……。

「あ、でも……」

「……どうした？」

リリシアが思い出した様に何かを語りだす。

だが、その言葉は俺の想像の540度を行く内容のものだった。

「たまに強いモンスターや次元を超えられるモンスターが、弱くなつた次元の狭間を超えて地球^{「ネリア」}に来る事があります」

「………はい？」

ありえねえ……。そんなバカな……！それってようはつまり……、

「俺達とても危険？」

「はい。とても」

そんな笑顔で言わないでくれえええええ！！

しかし、容赦無い現実が俺に降り掛かる。

「そうしてこちらに来たモンスターは最初は不完全ですが、本契約^{エンゲージ}主を倒せば現実化しますから」

リリシアの手によって。

嘘だああああ！！それって俺達狙われる要素バリバリじゃん！！
面白い事は歓迎だけど、その最中に死ぬのは嫌だああああ！！

「大丈夫ですよ。シローさんはお強いのです」

「………はあ」

そうリリシアに言われると大丈夫な感じがしてきた。
美少女の言葉は絶対だな。……………いや、リリシアの言葉は……
か。

そんな事をしていると、目的地である四季美モールに辿り着いた
みたいだ。

四季美モールの敷地内歩道を歩いて正門へ向かう。ちなみに横の
リリシアはと言うと、

「はわあ〜！凄くおつきいですう〜」

四季美モールが視界に入った瞬間からこんな感じだ。

その表情は子供の様にキラキラして、なんつーか……………めっちゃ可
愛い。

見惚れ半分、興味半分で俺はリリシアを正門へ導く。導くとは、
みとどこ行くか分からなかったからだ。

「ちゃんとして来るんだぞ」

「は〜い」

そのままリリシアを伴って正門を抜けた時、背筋に悪寒が走った。
それは何故か？それは聞き覚えのある女性の声が聞こえたからだ。
それは忘れられる筈も無い声。十五年間聞き続けた声。その主は、

「し、司郎？そ、その子は？」

「エ、エリー……………」

宮坂英理子に他ならない。

6つめ！ 買い物へ行こう！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

修羅場？ですね。大変そうです。

御意見御感想お待ちしています！

7つめ！ エリーの驚愕っ！（前書き）

もうはや言葉もありません。
お楽しみください。

7つめ！ エリーの驚愕っ！

「ししししし、し司郎！！」

「あ、あはは……」

しを言い過ぎだろう。とツツコミを入れるより、先ず先行するのはどうしよう。

エリーにリリシアと一緒に居るところを見られてしまった。それだけでは何も問題は無いはずなのだが、エリーは昔から俺の周りに居た女性を嫌っている。

思い返せば、中学生の時に仲良くなった図書委員の子が、泣きながら俺に絶交を突き付けた事があった。後々、友達から聞いた話だが、エリーが何かしたらしい。詳細は聞かせてくれなかったが。

ようは、エリーは俺に女性の知り合いが出来るのが面白く無いらしい。何故かは分からない。

俺がエリーを良く思っていないのは、ある意味でもこれが原因のひとつだ。

「あはは、じゃないわよ！誰その子！！？」

さながら
宛ら、彼氏が愛人と一緒に居るのを目撃したかの様な。

正にそんな様子で、エリーはリリシアを指差したまま硬直していた。

この返答次第で、俺の行く末が真っ暗になるかもしれない。ここは慎重に、

「初めまして、シローさんの家に住まわせて貰っているリリシアディと申します」

リリシアが腰を曲げて、とても優雅にお辞儀をなさる。わゝ、流石お姫様だゝ。

リリシアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！

「えっ??」

それこそ消え入りそうな声で、エリーは時が止まった様に凍結してしまった。

圧倒的な無の時間が、数秒、もしくは数分流れた時、ふと、エリーの両目から一筋の液体が零れ落ちる。

透明なその液体が地面に落ちた瞬間、エリーは何も言わず、何もせず、ただ俺達の横を通り過ぎ、逃げる様に走って行ってしまった。

終わった。

そう思った時には、時既に遅し状態。俺は、とても大事な物を失った後だった。

「シローさん？私……」

自分を責める様なリリシアの声に、俺は折れ掛けた心を保つ。

今、俺が折れる訳には行かない。リリシアが自分を責める事があってはならないのだ。

翌々考えれば、この時の選択はエリーを追った方が良いんじゃないかと思っただが、それは後の話。この時はリリシアを優先してしまっていた、そんな俺が恨めしい。

「何でも無い。リリシアが気にする事じゃないんだ」

こんな事を言った所でどうにもならないが、もしかしたらこれは俺自身に言っていたのかもしれない。

エリーの反応は、予想以上に俺の心を抉って行った様だ。それ故

に出た“他人を思いやる”という行動だったのかも。まあ、全ては後の祭りだ。もうどうしようもない。

「シローさん……」

「気分がこんなでも買い物止めるわけには行かないだろう。行くぞ」

「……………はい」

リリシアは何か言いたげだったが、今の俺にはそれを聞く余裕は無かった。

「おい」

「なに？」

「何で戻ってきてるんだよ!？」

俺達は四季美モールのフードコート、そのテーブルを囲む様に座っていた。

その中で、俺が一際大きく叫びだす。右隣に座る、エリーに向かって。

「だって、二人だけにしたら危ないでしょ?…………リリシアディちゃんか」

「俺は獣か!?!？」

エリーは何がしたいんだ!?!さっきの今で平然としているんだ!?!?

激しく疑問が渦巻いている。女性と言うのは切り替えが早いと聞いたが、ここまで早いものなのか?

「良かったですねシローさん」

左隣のリリシアが小声で言ってくるが、これは良かったのか？
今のエリーを見ていると疑問が湧いて仕方が無い。

「さあ、行くわよ司郎！！」

「どこに？」

「買い物に決まっているじゃないの！！」

無駄にテンションも高いし。もうテンションだけなら麻薬中毒者
となんら変わり無いぞ？

そして何故か、エリーが主導権を握るといふ展開。帰ってくれな
いかな。

エリーは視線をリリシアに向けると、満面の笑みで命令した。

「リリーちゃんも行くわよ！！」

「リ、リリー？」

エリーの呼び名に、リリシアは首を傾げた。

そりゃあ、いきなり呼べばな。当然と言えば当然だ。

「リリシアディじゃ呼びにくいでしょ？」

エリーは、さも当たり前のような顔をしている。

お前は何様だって。ただそう言うのは癪じゃくなので、絶対に言わない
けどな。

まあそんなでも、リリシアはとても嬉しそうに笑っていた。

「ありがとうございます！！」

姫様にあるまじき腰の低さだ。そういや、俺の時もこんな感じだったな。

リリシアが魅力的なのは、この腰の低さからか？姫様とは思えないんだよな。

「じゃあ行くわよ！」

エリーが先頭をきって歩き出す。だから主導権を握るな。三回も行くわよなんて言わなくても分かるから！

とは思っても、ついに行くんだけどね。俺、洗脳されてる？

「エリーさんとシローさんは似ていますね」

俺の横を同じ速度で歩くリリシアが、そんな事を言っていた。それに俺は、

「どこがだー！」

と怒鳴る。アイツと一緒にされるのは敵わないからな。

しかしリリシアは、優雅に微笑んでいた。……何なんだよ。女性には分らないものだ。

7つめ！ エリーの驚愕っ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

エリーさん変ですね。どっいう心境なんでしょう？

御意見御感想をお待ちしています！

8つめ！ エリーの変化っ！（前書き）

お楽しみください

8つめ！ エリーの変化っ！

「でもまあ、エリーが居てくれて助かったよ。俺じゃあ分からない事ばかりだからな」

「そうよ。感謝しなさい」

何故か主導権を握り、何故か高圧的なエリーに、若干どころじゃなくイラッと来たが、それを出すのは止めよう。後が面倒臭そうだし。ちなみに今は、エリーの協力の下でリリシアに必要な物を買って揃えている最中だった。日常的に必要な物はあらかた買った。後は服とかだけだ。

「ありがとうございますシローさん、エリーさん」

と、後ろを歩くりリシアが突然そんな事を言った。まあ、忘れがちだけどリリシアは何もして無いからね。でもそんな事は気にして無いんだけどな。

「気にすんな。無一文なんだからしょうがねえし」

「そうよ。どうせシローのお金だし」

おい。確かに俺の金かもしれないねえが、元は宮坂家の物だろうが。これまた突っ込むのも癪しゃくなので、俺は決して口を開かない。

話を変えるが、エリーにはリリシアの事を家出少女と説明した。異世界がどうのなんて話したら、俺は完全に頭がイッちゃった人扱いされるからな。一応、リリシアには口止めをしてるし。ぶっちゃけ、麻薬中毒者エリー（揶揄やゆです）にイッちゃった人扱いされるのは最悪だ。

「それでもです！」

突然の大声に、俺の思考は中断させられる。声の主はリリシアか。するとリリシアは並々ならぬ思いがあるのか、桜色の長髪を揺らしながら前のめりになっていた。

「だから別に良いって。これも何かの縁だしな」

ハッキリ言って、ただ面白そうだからって言うのもある。それに俺とリリシアの関係性からもしなければならぬ事だし。微妙なんだよな。俺とリリシアの関係って。一般人から見たら同居人と家主だけど本質的に言えば、送信者と受信者だけじゃないのも事実。そのせいで異世界むいこうから危険が舞い降りるんだから、一緒に居たほうが良いし。

なにより、リリシア居ねえと俺エクスカリバー聖剣使えねえし。とどのつまり、俺とリリシアは一緒に居るしかないのだ。それなら、俺の性格上、面倒を見てしまふんだよな。損な性格である。

「でも！」

「そんな無限ループはいいから。目的地に着いたわよ」

リリシアがまたも何か言いたげだったのを、エリーがナイスなタイミングで区切ってくれた。俺は今、初めてエリーを見直した。：

……………多分。

一瞬開けて視線を店内に向けると、そのままの状態で絶句する。というか固まった。でも視線の先には服が並んでいるだけだった。女性用の服だけしか並んで無いが、それぐらいなら問題無い。では何故、俺は硬直してしまったのか？

それなら簡単である。何故ならここは、

「まぢか……!!」

ランジェリーショップ
女性用下着取扱店でもあるからだ。

いやまあ、予想はしていたよ？ここにも来るんじゃないかな？つて。でも、いざ目にとると本能的に怯んでしまふ。これは男の宿命だな。

「しーーーーろっつ」

あつ、ヤバイ。エリーに弄^{いじ}られてしまふ。こいつは性格悪いからな。1週間はこの事で弄られそうだ。つまり、これを切り抜けるには、先手必勝！

「どうした？早く行くぞ？」

俺は爽やかな雰囲気をかもし出す。爽やか過ぎてキモイぐらいに。エリーは怪訝な顔で俺を見た後、俺の予想を超える事を言い出した。

「司郎、そんなにランジェリーショップ行きたいの？変態ね」

そう来たか!!少しも思う通りに動いてくれない奴だな!!
ただ、焦って反論したらドツボに嵌^はまるのは必至だから、反論するのは止めておこう。どうせエリーだし。

「シローさん……」

「本気にするな……!」

リリシアに勘違いされるのは我慢ならないけどな。とりあえず会話を終わらせて店内に入ってみる。

中は至って普通の店内。白い壁やら普通の棚やら、何も問題は無い。……のだが、

並べてある商品が、ガリガリ俺の良心を侵食していく。大体、商品のピンク率が高いんだよ！

「シローさん？顔が少し赤いようですけど……」

「気のせいだ！！」

ふと思うんだが、女性はもう少し俺達みたいな男を気遣ってくれば良いと思う。何故気付かない！？それとも面白がってるだけか！？

エリーは故意にだが、リリシアは天然だろう。それは分かっているのだが、この状況じゃ愚痴ぐちの一つも洩らしたくなる。

「さっさと終わらせてくれ」

しかし、当然の如くエリーは分かって無い振りをする。

ニヤニヤニヤニヤうざったいほどの笑みを浮かべ、どうして〜？と、聞いてきやがった。

「今日は大学休みでしょう？」

声のトーンがおちよくっている！分かっているくせにコイツは！！
エリーに怒鳴ろうとして、止めた。麻薬中毒者の対処は無視に限る。

「まあ分かっていたけども」

服を買いに来た女性の行動なんて一つに決まっている。それによつて起こり得る男性側が被る被害も想定済みだ。遠回しに言ってしまったが、ようは待たされるのはいつも男性側だと言う事だ。結果だけを直球で言えば、俺はかれこれ一時間はさらに待たされていると言つ事を言いたい。

「エリーで学習済みだ。もう諦めたよ」

ちなみにエリーは、この長々とした買い物術を中学生で身に着けていた。その被害に遭うのはいつも俺、流石に慣れもするさ。

今、エリーとリリシアは試着室に入ったまま、もう十分近く出てこない。ランジェシヨップで一人待たされる男の身にもなれよ。

「まだか？」

「もう少し」

耐え切れず声を掛けてみるが、返答は数分前と全く変わらない。便利だなもう少し。

そして俺は何も言わずに待っている。俺って損な性格してるよな。自分の残念な性格に嘆息をもらしていると、程無くしてリリシア達が入った試着室のカーテンが勢い良く開かれた。

「どう！司郎！！」

そんなテンションの高いエリーの声に反応して、面倒臭く試着室の中を見ると、そこには高貴なお姫様が居た。その人が視界に入つた瞬間、俺の思考も体と同様に停止してしまう。

ただ寸前に理解した事だけを記すとすれば、試着室にはとても美しい女性が立っていた。地球では到底ありえない太ももまで伸びた桜色の長髪に、優しげで大きなスカイブルーの瞳。裾にフリルの付

いた純白のワンピースという、ギャルゲのヒロインですと言っても信じて貰えそうな風貌をしていた。

俺はその美しさに、そして僅かながら内包される可愛らしさに、一時だけ言葉を出す方法を忘れた。意味合いが違うが、今の俺は空いた口が塞がらないを自分の身で体験しているんじゃないだろうか？

「……………」

思考が、賛美している対象の事を理解したのは、数秒経った頃だった。

俺が、美しい、可愛らしいと思考した対象は、紛れもないリリシアだ。その事をようやくと理解した瞬間、俺は気恥ずかしさからか、視線を少しそらす。

「似合ってますか？」

リリシアは声が不安げで、それが俺の良心を大量に削る。

まあ、返答は変わるはずも無いのだから、思ったままを嘘偽り無く吐露すれば良いだけだ。

「に、似合ってるよ」

あ、あれ？何故か、とても恥ずかしい。何でだ？

俺は熱くなる顔を冷やすために視線をそらす。でもそれは、リリシア達に表情を見せたくなかっただけかもしれない。

「ありがとうございます」

安心したような声色で、リリシアは褒められた事への感謝を述べてきた。それが余計に顔を熱くさせる。最早そらすだけでは足りず、

俺は後ろに振り返って、手で顔を扇いだ。

あー、恥ずかしい。何でだ？

「……………」

そんな中、何となく、エリーが俺を睨^{にら}んでいた気が……………しな
いでもなかった。

8つめ！ エリーの変化っ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

何かがおかしい？そんな気がするような……。

御意見御感想お待ちします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9071u/>

異世界が来たっ！ ～俺と少女とファンタジー～

2011年9月5日05時50分発行